

北海道プライマリ・ケア研究会の解散について

北海道プライマリ・ケア研究会 会長 長瀬 清

本年6月末の会報誌第35号の発送をもちまして、北海道プライマリ・ケア研究会の活動を終了いたしました。北海道医師会会員の皆様には何かとご協力を賜り、ありがとうございました。ここに会報最終号に掲載した私の巻頭言を転載し、ご挨拶にかえさせていただきます。

この度、長年に亘って活動してまいりました、北海道プライマリ・ケア研究会を解散することとなりました。会員の皆様にはこの間絶えずご支援ご協力をいただき心から感謝を申し上げます。

北海道プライマリ・ケア研究会は、実地医家のための会の参加者数名の先生方のご努力により、北海道独自の組織として設立までの準備期間を北海道医師会が後押しし、研究会発足と同時に独立した会としてこれまで活動をしてきました。当初設立に関わった先生方の熱意は敬服に値するものでした。

総会と年2回の学術集会での研究発表、35号にわたる研究会誌を滞ることなく発刊を続けてまいりました。その果たした役割はプライマリ・ケアの重要性が認識され、浸透するのに大変な力となったと考えています。

学術集会の回数も64回を数えるに至っており、他に例を見ない特異な会とお褒めをいただいております。

平成28年10月30日に開催された最後の学術集会では、現在唯一人となられた設立発起人の方波見康雄先生に講演『医療と人間をめぐる随想「プライマリ・ケア方法序説」試論』で締めていただけたのも幸いでした。

2025年には65才以上人口が3,657万人になるとされている超高齢社会の医療において、プライマリ・ケアの果たす役割が極めて重要です。そして多くの医療者がいち早くこの問題に取り組み、今日の医療を体系づけてきました。医療・医学の進歩、発展は目覚ましいものでした。原点であるプライマリ・ケアの重要性もますますその認識があらたになっております。社会的にも地域包括ケアシステムの構築が重要視されています。そしてそれを担うのがプライマリ・ケア医です。

わが国には実地医家の会、そこから誕生したプライマリ・ケア学会が大きく育ち、多くの若い医療関係者が毎日切磋琢磨し、国民により良い医療を提供すべく研鑽を続けています。

プライマリ・ケア学会もプライマリ・ケア連合学会として再出発し、多くの若手医師が立派に学会を盛り上げており、当研究会の役割を終えたと感じています。

本研究会に参加されていた先生方皆様が、プライマリ・ケア連合学会に引き続き参加されご活躍されますこと、また、地域住民の健康の保持、増進に尽くされますことを心から願っております。